近世相模国大山寺普請の内容的特質と明王太郎の行動及び役割について

CHARACTERISTICS OF CONSTRUCTION OF ŌYAMA-DERA AT SAGAMI-KOKU IN PRE-MODERN PERIOD AND PARTICIPATION OR PART OF MYOYO-TARO

山岸 吉弘*

Yoshihiro YAMAGISHI

In Japanese pre-modern period at Sagami-koiku and surrounding area, Mt. Ōyama and Ōyama-dera is one of the most famous mountain and temple. Edo-bakuh had been constructing its buildings continually, but main executive organ was shifted over from Edo-bakuh to Ōyama-dera. A technical expert named Myoyo-taro lived at the foot of Mt. Ōyama. He had taken action each time to acquire a managerial position of construction, and his purpose materialized finally. This was the unusual case compared with other construction of temples that Edo-bakuh took lead. The primary factor of it consists in the peculiar context of Ōyama.

Keywords : Sagami-koiku in pre-modern period, Ōyama-dera, construction, Edo-bakuh, Myoyo-taro, region and community

近世相模国, 大山寺, 寺社普請, 江戸幕府, 明王太郎, 地域と共同体

1. はじめに

大山寺とは、丹沢山地の南東に位置する大山（阿夫利山）に伽藍を持つ山岳寺院で、山頂には阿夫利神社を擁する。江戸時代には関東各地で講が組織され、大山詣でと称して多くの人々が参詣に訪れたことで知られる¹⁾。明王太郎は、大山の麓に居住した大工棟梁の名であり、代々に亘って襲名した²⁾。その系統は近世以前に遡り、明応二年（1493）を上限にして存在が確認されている³⁾。特に、江戸時代の活躍は遺された史料から知られ、大山寺の堂舎を始め多くの寺社等の建築を手掛けた⁴⁾。

大山寺普請は、江戸時代を通じて行われた⁵⁾。それには幕府が関与し、堂舎の造営も幕府方の工匠が携わっている⁶⁾。一方で、明王太郎も大山寺の造営に参加し、地域を代表する大工として特別な働きを見せている。つまり、大山寺という一箇所において、幕府方の造営組織に属する工匠と明王太郎を中心とした在地の大工がそれぞれ任に当たったことになる。両者が大山寺の造営を協同するに到った経緯や、その場合でのそれぞれの役割分担など、なお不明な点も多い。大山寺の造営に関して基本的な内容は既にまとめられているものの⁷⁾、それらは残された課題の一つと言えるだろう。

これまでも、近世における寺社造営とそれを担う大工組織に関する論考は発表されている。まず挙げられるのが江戸幕府における造営組織であり、その成立や変遷、或いは職制や被官大工の役割などが明らかにされている⁸⁾。特に、幕府の造営組織による在地の有力寺社の造営に対する言及は注目され⁹⁾、大山寺の場合を検討する上での示唆となる。また、造営関係の幕政を担う在京機関としての

中井家と、上方の各地で仲間を結成した在方大工に関する研究の蓄積は多い¹⁰⁾。その中でも、幕府方の被官大工と動員された在方大工のそれぞれの役割などの観点は大山寺の造営にも当て嵌まる。また、専門的な技能を有し造営の担い手になり得る存在として、江戸の市井に暮らす職人などが挙げられる。そのような職人を江戸町人として捉え、それを支配する幕府との関連から職人の在り方が検討されている¹¹⁾。幕府の造営組織も、少なからず江戸支配という目的の中に位置付けることができる¹²⁾。このように見ると、造営に携わる各人は幕府方（被官大工）・村方（在地大工）・町方（江戸職人）のそれぞれにおよそ区分される。いずれも社会的な立場に規定された存在としての理解であり、大山寺の場合でもまずその社会的背景を把握する必要があるだろう。

本稿では、近世を通じて行われた大山寺普請の内容を改めて辿り、その特徴を指摘することを目指す。そのための方法として、大山寺と幕府との関係や実際の造営を担う工匠の立場や役割などに注目する。その際、他の寺社の場合と比較することは大山寺の特異性を見出す上で有効であるために、適宜に参照する。また、大山寺普請を考える上で明王太郎の存在は重要であり、各回での行動を明確にさせることを行う。明王太郎の活動を知ることが、上記の目的を達成させる最適の方法であり、それ自身を本稿の目的の一つとしている。

2. 大山寺普請の内容と特徴（その1）— 結界の存在 —

（1）近世大山寺の成立

近世の大山寺は、徳川幕府の成立と共に形成されていった経緯が

本稿は、部分的に以下の既発表内容を含んでいる。山岸吉弘「明王太郎と大山寺の関係について—江戸時代に行われた大山寺普請において明王太郎が演じた役割—」『日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ』2006年度、日本建築学会、2007.02（東京・2007年3月）。

* 早稲田大学大学院理工学研究科 大学院生・修士（建築学）

Graduate Student, Faculty of Science and Engineering, Waseda University, M. Architecture

あり、それ以前とは様相が大きく異なる¹³⁾。大山寺の堂舎の造営も、この時に出現した社会的背景が少なからず影響するので、具体的な検討を始める前に要点をまとめておく必要がある。

開府二年後の慶長十年（1605）一月に、家康は春日局の勧めにより大山寺を訪れる¹⁴⁾。これが直接的な契機となり、大山寺と家康（徳川幕府）との関係が開始されることとなる。この時、大山寺の来歴を聞き知る家康は、山内を整理することを構想し、清僧のみの居住を許可する「結界」の制定を明言するが、直ぐには果たし得ず、高野山真言宗の高僧である実雄^{じつお}をして大山寺別当の八大坊に任命し、その実現を目指した¹⁵⁾。また、山内伽藍の再建にも着手し、同年四月に代官頭の伊奈備前守忠次を伽藍再建の奉行に任命して再建に当たらせ¹⁶⁾、慶長十三年（1608）に各堂舎が落成している¹⁷⁾。結界は慶長十四年（1609）八月二十八日に発せられた「定」によって具体化し、多くの修験が下山を命じられて御師となり¹⁸⁾、それと同時に山内には供僧十一坊が新たに設けられ、八大坊と併せて十二坊となった¹⁹⁾。その他にも種々の法度が制定され²⁰⁾、また寺領として百石が与えられ²¹⁾、「慶長の変革」が進行することによって²²⁾、近世大山寺とその周辺の在り方を規定する基礎が成立していった。

家康が実行した山内改革は、その後の大山寺を特徴付けている。結界により浄域の内外は明確に区別され、下山した修験は御師となって俗界と浄域を繋ぐ役割を果たすようになる。明王太郎も下山した一人であり、以後はこの位置付けに身を置いて、大工としての活動を展開させていくことになる²³⁾。

（2）慶長期の普請

江戸時代に行われた大山寺普請の最初が、慶長期の伽藍再建であり、以後も幕府による支援は続けられる（表1）。この時に行われた造営の詳細を知る史料は遺されていないが、明王太郎が記した由緒には若干の記述がある²⁴⁾。それによると、代官の伊奈備前守の指揮の下で堂舎の見分が行われるが、本宮に限っては<禁断所>に就き、幕府方に代わって<古来之通>に明王太郎が見分を行い、修復も仰せ付けられ、それに任じたとしている。つまり、この時点ではまだ家康による結界の制定は実現されていないものの、それに類似する効果が依然として機能していたということになる。家康が結界の制

表1 大山寺の造営内容と幕府からの下附金品

和暦	西暦	堂舎数	建立・修復堂舎	内容	金品	数量
慶長13	1608	27棟	石尊社・大天狗・小天狗・徳一社・風雨社・白山社・本堂・明王社・鹿島明神・石尊権現・宝蔵・熊野権現・天照大神・浅間社・毘沙門天・蔵王権現・大黒社・八幡社・本地堂・神興堂・樓門・経蔵・鐘樓堂・八大童子・仁王門・二重堂・前不動	建立（伽藍再興）	（不明）	
寛永16	1639	14棟	本堂・後三社・本宮・二重宮・樓門・仁王門・本地堂（大師堂を曳屋）・行者堂・神興堂・八大童子宮・天神宮・前不動・八幡宮・大黒社（以上三社は八大坊が建立）	建立	金	1000両
延宝4	1676	20棟	大宮・樓門・仁王門・本地堂・明王社・山王社・浅間社・前不動堂・一切経堂・鐘樓堂・神興堂・八大社・八大社釣鐘・八幡社・大黒社・観音社・白山社・阿弥陀堂・大師堂・護摩堂	屋根修復	金	200両
元禄7	1694	14棟	本宮・明王社・山王社・浅間社・大黒社・八幡社・本地堂・大宮・神興堂・鐘樓堂・樓門・二重堂・經堂・八大社・同釣鐘堂・仁王門・前不動	建立	銀	14匁
宝永1	1704	7棟	本宮・大天狗社・小天狗社・徳一社・石尊大権現・風雨社・白山社	建立	米	100石3斗2升
享保4	1719	5棟	石尊社・大天狗・小天狗社・徳一社・風雨社	建立	金	200両
安永6	1777	5棟	本社・大天狗・小天狗・徳一・雨風	建立	銀	100両

※1：建立・修復堂舎の項は、手中家資料〈14/68/148〉・「大山史」より作成。物品と数量の項は、「大山史」・「元禄元年辰より十ヶ年以來遠国寺社御普請御修復入用覚」（村上直 校訂『竹橋余筆別集』、近藤出版社、1985.06）・「徳川実記」より作成。 ※2：寛永十六年には建立しない堂舎も記されており、その数は二十六棟に上る。また、八大坊が負担するものについて「最も金残り次第此三社も建立すること」と記されている。 ※3：延宝四年の普請は屋根の修復のみである。 ※4：安永六年に下附された銀100両は、およそ金16両2分である（金1両＝銀60匁換算）。

定を決め清僧以外の居住を禁じたのも、大山寺には元来そのような聖域が定められていたからであり（前小節参照）、当時においてもその旧例が<禁断所>という形で残されていたというのは考え得ることである。或いは、後年において結界を理由に明王太郎が自らの職域を確保することを目論む際（次節にて後述）、慶長期においても同様の事例があったという由緒を創作したとも想定できるだろう。事実を検証する史料は遺されていないが、これまでに確認してきたような当時の状況と、由緒にある記述の内容の間に大きな齟齬や矛盾は見られない。

記録・棟札等により造営の概要を知ることができるのは、寛永期より以後のものとなる（表2）。

なお、大山寺に近在する有力寺社として、伊豆山神社・箱根神社・鶴岡八幡宮などが挙げられ、いずれも幕府による造営が行われている（表3）。慶長期では、伊豆山神社と箱根神社の造営が実施され、遺された棟札には家康（幕府）直属の工匠の名前が記載されている²⁵⁾。また、いずれも慶長十七年（1612）十一月十三日（十二日）の日付が入れられており、両社が一括して扱われていることが分かる。

（3）寛永期の普請

次に行われるのが、寛永期の大山寺普請となる。寛永十五年（1638）四月七日に、幕府より寺社奉行に発せられた大山寺の再興の命により、安藤右京進重長と松平出雲守勝隆が検使に定められ、状況の調査が行われた²⁶⁾。翌十六年（1639）に造営が決められ、対象堂舎の員数に見合う金一万両が下附されることとなる²⁷⁾。造営の開始に向けて担当する奉行や大工が選出され、翌十七年（1640）二月一日にそれら一行は調達した木材を携えて江戸を発ち、舟に載せて花水川を上り牛車に引かせて大山寺に運び入れ²⁸⁾、同年八月十四日に手斧初めが執り行われるに至る²⁹⁾。棟札（表2参照のこと）に記載される大工は、<大工頭>の木原木工充義久を筆頭に<棟梁>の平内大隅守正信など全て幕府方に属する工匠である。以上のことから、堂舎の見分・入用の積算・造営料の確保・資材の調達・建前の開始などの各工程において、幕府の主導により進められていることが分かる³⁰⁾。同時期に行われた鶴岡八幡宮の堂舎の造営と同じように³¹⁾、大山寺の堂社も幕府方工匠の特徴を反映した建築となったことが想定される。一方で、明王太郎（景吉）の名前や、他の在地の大工の名前は棟札等に記されていない。後年に作成された明王太郎の由緒には、明王大権現宮と石尊宮は<深秘>に就き明王太郎自身が<棟

表2 大山寺の造営と従事した大工

年代	職名	氏名	堂舎
寛永18 (1641)	御奉行	成瀬五右衛門尉重治	不動堂
	手代	小畑庄太夫正延	
	同	横山加左衛門利宣	
	同	櫻井三右衛門正重	
	御大工頭	木原木工允藤原義久	
	棟梁	平内大隅守正信	不動堂
	小工	三鬼嶋長右衛門吉成	
	小工	平(坪)内庄右衛門幸盛	
	御大工	鈴木長兵衛支配	
	棟梁	川合利右衛門勝成	
元禄6 (1693)	棟梁	橋本七右衛門忠好	明王大権現社
	同	手中明王太良吉富	
	同	手中明王太良吉富	
	御大工	鈴木長兵衛支配	
	大工棟梁	川合理右衛門勝成	
	同	橋本七右衛門忠好	山王社
	小工	手中明王太良吉富	
	小工	武藤勘右衛門	
	小工	田中三良兵衛	
	小工	今里源左衛門	
宝永1 (1704)	大工	手中明王太良吉富	石尊大権現、大天狗社、小天狗社、雨風社
	小工	武藤勘右衛門	
	小工	田中三良兵衛	
	大工棟梁	手中明王太良吉富	
	脇棟梁	大貫勘兵衛	
享保5 (1720)	脇棟梁	武藤武兵衛	石尊社、大天狗、小天狗社、雨風社、徳一社
	脇棟梁	米山源右衛門	
	脇棟梁	齋藤傳右衛門	
	大工棟梁	手中明王太良吉富	
	小工	手田浅右衛門	
安永7 (1777)	小工	石井儀兵衛	石尊宮
	小工	市川勘右衛門	
	小工	鎌田仙右衛門	
	小工	手中明王太良吉富	
	小工	手中明王太良吉富	

※1：手中家資料〈14/3351〉より作成。 ※2：寛永十八年の小工は、坪内が本来である。

表3 伊豆山神社・箱根神社・鶴岡八幡宮の造営と従事した大工

伊豆山神社								
和暦	西暦	月	日	職名	氏名	堂舎	内容	資料
慶長17	1612	11	13	大工	中井大和守正清	宝殿・拝殿	建立	棟札
				棟梁	花村源右衛門尉宗次			
				-	花村長左衛門正重			
				-	石川左兵衛尉友重			
寛文7	1667	9	2	奉行	丸田四郎左衛門吉忠	大権現社・幣殿・拝殿	修造	棟札
				奉行	剣持助兵衛清行			
				大工	内山清兵衛由茂			
元禄10	1697	6	10	奉行	進田門左衛門重定	大権現社・幣殿・拝殿・護摩堂・本地堂・祭所・御供所・宝蔵・番所・雷電宮・本宮社	修造	棟札
				奉行	寺田平太夫正知			
				大棟梁	平内大隅政治			
				小棟梁	脇丸左衛門元勝			

箱根神社								
和暦	西暦	月	日	職名	氏名	堂舎	内容	資料
慶長17	1612	11	12	番匠	花村長次衛門	-	-	記録
			13	造営惣奉行	快速	宝殿・拝殿	建立	棟札
寛文7	1667	9	18	大工	剣持助兵衛清行	三所大権現社、本宮権現社、山王権現社、相殿宮、護摩堂、相殿堂	修造	棟札
					内山清兵衛由茂			
元禄10	1697	5	18	大棟梁	平内大隅政治	三所大権現社、本宮大権現社、相殿宮、相殿堂	修復	棟札
				小棟梁	酒井儀兵衛最治			

鶴岡八幡宮								
和暦	西暦	月	日	職名	氏名	堂舎	内容	資料
寛永1	1624	11	-	奉行	右衛門佐源(松平)正久	-	-	棟札
				大工	遠江守藤原(鈴木)長次			
				奉行	備前守源姓松平氏隆綱			
寛文8	1668	8	12	大工	鈴木修理藤原長常	-	-	棟札
				-	木原内匠藤原義永			
				奉行	酒井忠孝			
元禄10	1697	-	-	大工	鶴飛驒正村	若宮	-	棟札
				小工	久村甚左衛門忠信			

※1：『熱海市史』上巻・『国幣小社伊豆山神社誌』・『箱根神社大系』上巻・『同』下巻・『鎌倉市史』資料編 第一、より作成。 ※2:伊豆山神社では、上記表の「堂社」他に、慶長期に本社・雷電社・本宮・下宮・般若院などが、寛文期に本社・若宮社・下宮やその他の伽藍・末社などが、それぞれ造営された。 ※3：伊豆山神社の元禄十年の小棟梁は、脇場丸左衛門元勝が本来である。

梁職>を仰せ付けられたという一文が記述されているが³²⁾、慶長期の場合と同様に史料上の制約からその真偽は検証し得ない。寛永十八年(1641)十一月八日に堂舎は落成し、春日局より御供料を賜り、翌九日には入佛式が行われ、今回の造営は完了した³³⁾。

その後、延宝期にも大山寺は幕府より屋根修復のための造営料を賜っている(表1参照のこと)。それと同時に、金輪寺にも五百両と樽木二万挺が下附されている(造営の対象は王子権現の堂舎)³⁴⁾。ここでも、慶長期における伊豆山神社と箱根権現の造営と同様に、両寺社は一括して扱われていることが指摘できる。

(4) 元禄期の普請

続いて、元禄期にも大山寺普請が行われる³⁵⁾。今回は、貞享三年(1686)に八大坊が寺社奉行に山内の堂舎の修復を願い出ることから始まる³⁶⁾。それより六年後の元禄五年(1692)一月に、寺社奉行の戸田能登守忠真から八大坊に宛てて登城の命が出され、関東五ヶ寺が揃って参上する³⁷⁾。関東五ヶ寺とは、八大坊(大山寺)の他に、金剛王院(箱根神社)・般若院(伊豆山神社)・莊厳院(鎌倉八幡宮)・金輪寺(王子権現)の各寺社で(五ヶ寺が()の別当に当たる)³⁸⁾、幕府の触れを各寺院に伝える触頭寺院を任じた³⁹⁾。各々の寺院への支援が個別に検討されるということではなく、江戸周辺の有力寺院(つまりは関東五ヶ寺)がまとめて扱われている。その後、幕府による見分の実施が決定し、伊豆・箱根・鎌倉の三箇所が同時に行われ⁴⁰⁾、造営も実施される(表3参照のこと)。八大坊は同年八月九日に改めて寺社奉行三方に見分を願い出、それに対する戸田能登守の返答は、これまでの修復歴を差し出すようにというものであった⁴¹⁾。このように、各寺院は堂舎の修復を幕府に願い出る立場にあり、幕府はそれを聞き入れる側にあることから、造営を実施することの決定権は

幕府にあることが分かる。このような幕府の態度は、寺社造営を行うに際して特定の目論見があったことを想定させる。その一つとして、諸藩に課す賦役としての手伝普請が挙げられるだろう⁴²⁾。実際に、先述の五ヶ寺の内の一つである伊豆山神社における寛文期と元禄期の造営では、小田原藩の稲葉氏や大久保氏が奉行の役を命じられており、幕府より負担を要求されている⁴³⁾。但し、大山寺に関しては手伝普請ではなく、全てが幕府による財源で賄われており、その点において幕府が支援することの利点や意義は曖昧である⁴⁴⁾。

大山寺は再三に亘って幕府に掛け合い、ようやく堂舎の修復は着手される。元禄五年(1692)十月九日に、<町棟梁>の河合理兵衛・橋本七左衛門の両人は<大工頭>の指示により勘定奉行の稲生伊賀守正照に罷り出⁴⁵⁾、大山への見分が申し付けられ、それと同時に五味小左衛門・内山七兵衛・豊前十左衛門が見分奉行に仰せ付けられている⁴⁶⁾。翌十一月二十八日に、<棟梁>の二人は見分から戻る⁴⁷⁾。翌元禄六年(1693)二月には、<大工頭>と代官の三方を交えて大山寺の「大目録」や「入用大積」の相談が行われ⁴⁸⁾、翌三月には入札の触れ込みが江戸中になされた⁴⁹⁾。同年四月に、五味小左衛門と豊前十左衛門には大山寺の普請奉行に仰せ付けられ、河合理兵衛と橋本七左衛門には大山に遣ることが申し付けられ、同年五月二十一日に出府し、造営が開始されるに至る⁵⁰⁾。

この時に修復された堂舎と造営を担当した工匠は、記録により知ることができる(表2参照のこと)。<御大工>として鈴木長兵衛の名前があるが、実際に大山に赴いた形跡はなく、組織の長として造営を「支配」し、川(河)合利右衛門と橋本七左衛門が<棟梁>として務めた。それら工匠の名前は、不動堂・明王大権現社・山王社の各堂舎の項にある。

一方で、本宮にはこれら三人の名前はなく、変わって<大工>の明王太郎(吉當)と<小工>の武藤勘左衛門・田中三良兵衛・今里源左衛門の四人が記載されている。明王太郎は勿論のこと、その他も全員が在地の大工であり、大山や山王原(伊勢原市上粕屋)などに居住していた⁵¹⁾。特に、田中三良兵衛は明王太郎の弟子を自称しており、地元鎮守の棟札に名を残している⁵²⁾。このように幕府方の大工を入れずに本宮の造営を行うことになった経緯は、見分の段階での幕府と大山寺の交渉内容から明らかとなる。幕府方の奉行の三人と<棟梁>の二人が山内の見分を命じられ現地に赴く際、本宮は古来より禁行であるため、見分を見合わせることを八大坊が要請し、それが認められている⁵³⁾。幕府方の造営組織に代わって、大山寺の采配で明王太郎が造営の一切を請け負い⁵⁴⁾、造営のための仕様書や入用書も作成し⁵⁵⁾、先の入札とは別に造営料が下附される。その際、結界という特別な事情も加味されて、額が多く見積もられている⁵⁶⁾。

明王太郎が棟梁職を獲得することができたのは、鎌倉大工が幕府方の組織に取り込まれる事例があることを考慮すれば、異例であったと言えるだろう。鎌倉大工の惣右衛門は、元禄期における鶴岡八幡宮の造営に際し、<工割之儀難申付>とされ、<棟梁共致候雇大工之内江入雇作料二而相勤候様こと申渡>ということが決められている⁵⁷⁾。惣右衛門に大工を割り振るのではなく、雇い大工の一人として従事させるという内容である。つまり、惣右衛門は自立してある棟梁として参加するのではなく、幕府方の造営組織に組み込まれて労務をつかさどることになる。この点において、明王太郎は幕府やその造営組織から独立しており、上記の事情とは全く異なってい

ると言える。

(5) まとめ

寛永期の普請は、幕府の造営組織によって手掛けられている。元禄期の普請も、資金源となる幕府の一存によってそれは実現し、幕府方の造営組織によって実施されるが、部分的に在地の大工集団がそれに加わっていた。それは他者の進入を禁忌とする結界の存在を幕府に主張した結果であり、大山寺に特有の状況を利用して幕府方の造営組織を退けたと言える。

3. 大山寺普請の内容と特徴（その2）—明王太郎の存在—

大山寺普請において、明王太郎は幕府方奉行や大山寺八大坊に書状を提出し、自身を＜棟梁職＞に任命するよう請願する⁵⁸⁾。

慶長期や寛永期の普請において、他者の進入を忌み憚る堂舎に関しては古来の慣例に倣い、明王太郎がその役を担ったという内容の由緒が作成されていたことは既に見た通りである。元禄期の普請においても、これと同様の主旨で明王太郎は上申する。但し、今回の普請はこれまでと異なり、入札を実施することが幕府によって決められていた。しかし、八大坊から幕府方に宛てた書状の中に、本宮は他者を禁忌とするために＜入札難被仰付＞として、代わりに明王太郎に一切を請け負わせることとし、結局は入札は行われていない⁵⁹⁾。

入札の件は明王太郎が作成した請願書にも影響し、提出するまでに幾度か推敲している⁶⁰⁾。その中で、最も体裁が整っているのが「口上」であり、日付も記入されていることから、おそらくこれに近いものが実際に提出されたのであろう⁶¹⁾。その内容は、①先年（元禄五年）霜月の大山見分の節には明王太郎が幕府方の奉行や棟梁を案内したこと、②本宮は明王太郎が見分を行ったこと（結界のため）、③先祖より代々に亘って棟梁職を担ってきたこと、④以上により当普請においても棟梁職を仰せ付けられるべきこと、の四つに大別できる。推敲段階の書状には、幕府が実施する入札に言及するが、実際には実施されなかったものであり、「口上」からはその文面は削除されている。明王太郎と八大坊（平井彦右衛門）は、幕府の入札で落札した業者とは別に、江戸白子屋の吉左衛門に入用の伐木を買い付けている⁶²⁾。

大山寺普請に際して、明王太郎は特別な工匠として絶対的な立場にあるということではなかった。それ故に、造営が行われる度に行動を起こし、棟梁職の獲得に努めた。造営は幕府の主導により進められるが、結界が定められているという大山寺に特有の状況を利用して、明王太郎は自ら大工棟梁として活動する場を確保していった。

4. 明王太郎の棟梁職の獲得

(1) 宝永期の普請

宝永期に行われた大山寺普請も、その初動は幕府が関与している。元禄十六年（1703）十一月二十三日の夜に起こった地震を契機に幕府は大山の見分を決め、宝永元年（1704）三月二十七日に河辺六左衛門は小幡上総介よりその御用を仰せ付けられ、勘定奉行の中山出雲守時春へ参上して代官の兩宮勘兵衛を交えて申し合わせをしている⁶³⁾。さらに同年四月三日に、＜棟梁（町棟梁）＞の辻内又左衛門と桑原伝八は、大山の社堂見分を申し付けられる⁶⁴⁾。幕府の使者として大山寺に來訪するのは、代官と＜御大工＞と＜町棟梁＞が二人

の計四人で⁶⁵⁾、同年四月十日に山内を見分し⁶⁶⁾、同月二十一日に江戸に帰着する⁶⁷⁾。一方で、明王太郎（吉當）は石尊大権現御宮殿・大天狗社・小天狗・兩宮風宮社・徳一八大社・白山社の各堂舎の概要とそれらの破損状況を記した「見分覚」に、それを踏まえた「入用積り帳」を作成する⁶⁸⁾。同年四月二十七日に「見分覚」と「入用積り帳」を携え自ら江戸に赴き、翌五月十三日には先に帰府していた兩宮にそれら書面を提出している⁶⁹⁾。その翌十四日に、兩宮と河辺が阿部豊後守（この当時は飛騨守）に井上大和守正岑の立会と小幡上総介・中山出雲守の列席の中、見分の報告をしており⁷⁰⁾、明王太郎の出府を待ってそれは行われた恰好となる。また、河辺以下幕府方の大工は見分にこそ参加したものの、棟札（表2参照のこと）にはその名が記されておらず、明王太郎を中心とした在地の大工のみで構成されている。この造営では、幕府から多額の造営料が下附され、見分の使者も送られているが、実際の多くは明王太郎とそれに付く在地大工が担っていたことが分かる。

(2) 享保期の普請

享保期に行われた大山寺普請において、幕府側の目立った動きは確認されない。唯一に幕府からは造営料が下附されるが、その額は見分を踏まえたものではないために實際を反映しておらず⁷¹⁾、不足が生じた分を大山寺の内部で捻出している⁷²⁾。實際の造営に関しては、明王太郎（吉當）が全ての役を担い、入用を積み上げ、各工程において指揮を執る⁷³⁾。造営に参加した大工は、＜棟梁＞の明王太郎に、＜脇棟梁＞の勘兵衛・武兵衛・源右衛門・傳右衛門が続く。この他に、山王原（子安）大工の延べ千八百五十二人半と大山大工の延べ千三百十四人半が従事し、明王太郎と武兵衛がそれぞれの地域を代表してそれら大工を率いた。また、手斧初めの際には山王原大工が九人と大山大工が十人の計十九人が、上棟の際には計三十二人の大工が、それぞれの儀式に加わって祝儀を賜っている。ここにおいて、大山寺の造営は幕府方の工匠が関与することはなく、明王太郎を中心に在地の大工のみで行うようになる。

この頃、寺社の造営という事に関して、幕府の態度が変化していく⁷⁴⁾。享保十四年（1729）二月に幕府より出された触れを端緒に、寺社造営に関する政策の転換を表明する触書が続いた⁷⁵⁾。それらの内容は基本的な部分で一貫しており、慣例的に幕府による修復の支援が行われ得る寺院（「御修復所」と記される）というのは存在しないこと、幕府に頼らず自力（寺社領や世間・氏子の助力）にて修復すること、或いはそれがかなわない場合は勸化・開帳・富興行等により修復料を賄うことなどが、その骨子となる。大山寺（八大坊）も例外ではなく、寛延四年（1751）十月には「諸堂社大破」を理由に幕府より勸化の実施を許可されている⁷⁶⁾。なお、それを踏まえて実際に修復が行われたという記録は残されていない。

(3) 明和・安永期の普請

明和・安永期に行われた大山寺普請は、明和八年（1771）二月に起こった火事による被害の復旧のためのものである⁷⁷⁾。翌三月に、明王太郎（景直）は別当に宛てて＜棟梁職＞を仰せ付けられるように請願書を提出すると共に⁷⁸⁾、堂舎の絵図面を作成している⁷⁹⁾。同年八月十四日に、明王太郎は伐木の吟味と寸法の書付けを別当から命じられ、弟子を連れ木挽と共にこの作業を行っている⁸⁰⁾。罹災より時間を置かずして再建に向けて行動することができたのは、日頃から近隣より伐木の寄進がなされていたためである⁸¹⁾。翌九月に江

- 同文献では、明王太郎の活躍は幕府の大山寺普請がなくなる安永期より隆盛に向かい、嘉永年間において江戸時代の頂点に達する、という見解が示されている。
- 8) 幕府造営組織の構成や被官大工に関する研究は、田邊泰・鈴木解雄・渡辺保忠・大河直躬・西和夫・内藤昌ほかの諸氏による一連の論考がある。
- 9) 鈴木解雄「近世職人の歴史的役割」(『建築雑誌』893、日本建築学会、1961.01) や、同「江戸時代中期における助役組織の考察」(『日本建築学会論文報告集』66、日本建築学会、1960.10) など。
- 10) 中井家及び上方の大工に関しては、平井聖・川上貢・横田彦彦・吉田高子・渡辺勝彦・谷直樹・吉田純一ほかの諸氏による一連の論考がある。
- 11) 江戸の職人に関しては、乾宏巳氏による一連の論考を参照した。同「江戸の職人」(『江戸町人の研究 第3巻』、吉川弘文館、1974.01 など) では、資料的な制約と断りながら、職人を幕府の町人支配の一環として捉えている。
- 12) 鈴木解雄「江戸幕府小普請方について」(『日本建築学会論文報告集』60、日本建築学会、1958.10) では、小普請方と江戸町方の職人との関係に触れられている。
- 13) 近世初期の大山寺に関しては、鈴木章生「相模大山の慶長山内改革について」(『立正史学』60、立正大学史学会、1986.09) や、松岡俊「相模大山御師の形成と展開」(『伊勢原の歴史』7、伊勢原市、1992.03) で検討されている。
- 14) 家光の世継問題の渦中にあった春日局は、慶長九年(1604)十二月に大山寺に出向いて祈願をするなど、篤く信仰していた(『大山史』『相模大山縁起及文書』、武相考古會、1931.04、55頁)。大山と幕府の関係を理解する上で、このような経緯で始まったことは考慮されてよい。
- 15) 「大山史」(『相模大山縁起及文書』、52-53頁)。大山寺の整理も開府直後の家康の宗教政策の一環として捉えたと、その政治的意味は慶長十三年(1608)八月二十八日に「関東古義真言宗諸法度」が諸所に発せられたことと同質のものと考えられる。また、慶長十年(1605)四月に伊奈備前守は<寺領御寄附>とそれに対する<軍役>の奉仕を大山寺へ伝えるが、実雄がこれを<辞退>し、これより四年後の慶長十四年(1609)に今度は<軍役之沙汰>は<有之間敷>として拝領しており、幕府の支配体制に組み込まれずにいたとも言える(『大山寺記録写』手中家資料<4976>)。
- 前略 ---
- 一同年四月、伽藍御再興御奉行伊奈備前守殿、
此時寺領御寄附可致為、極之旨、重々上意、
難有之、此節於寺社領、茂節其軍役之沙汰依有之、
実雄頼二奉致辞退之
- 中略 ---
- 一同十四寅戌年、軍役之沙汰曾有之間敷二而、寺領可残拝領旨、上意有之、大山境内坂下
子安之内、百石 御寄附 御黒印被成下之
- 後略 ---
- 一方で、大山寺に関しては特に実雄が教学復興を目論んだもの、という見方もある(辻善之助『日本佛教史』第八巻、岩波書店、1961.01、188頁)。
- 16) 代官頭の伊奈備前守が果たした役割には、各地の検地と共に寺社領支配の確立が挙げられる(村上直「関東郡代成立の歴史的前提-伊奈備前守忠次ぐを中心に-」『徳川林政史研究所 研究紀要』昭和43年度、徳川林政史研究所、1967.03)。
- 17) 「大山史」(『相模大山縁起及文書』、55頁)。
- 18) 下山した御師は、主に峠の東側の山道入り口にある坂本(伊勢原市 大山)と西側の山道入り口にある養毛(秦野市養毛)に定住し、集落を形成した(西海賢二「相州大山講と養毛御師」『立正史学』57、立正大学史学会、1985.03 や、松尾俊郎「相模大山の登山口聚落としての大山町と養毛」[一] / [二]』『地理教育』20-1/20-2、地理教育研究会、1934.04/1934.05)。
- 19) 修験が下山することで御師となり、聖域となった大山寺と俗間にある檀家を仲介する「取次」という制度が発生する(松岡俊「相模大山寺の「取次」制度の構造-媒介する宗教者の取次をめぐる-」『秦野市史研究』16、秦野市、1996.03)。明王太郎も下山を命じられた中の一人であり、家康が登山した年の慶長十年(1605)二月中旬に、秋山村の山王原(坂本)に移住している(「下糟谷之庄之内於前高森ニ云々」手中家資料<11>)。
- 20) 法度の触れは四度に及び、結界を制定した「定」の他に、清僧の心得を定めた「大山寺諸法度事」等がある。また、寺領が下附されたことに伴い、大山寺にも政治的な執行能力が要求されるようになり、福永町(伊勢原市子易)に執務機関(八大坊下屋敷)が設けられ組織の運営に当たった(『大山史』『相模大山縁起及文書』、66頁)。
- 21) その他に、私領(八大坊領)が五十七石ある(『大山史』『相模大山縁起及

- 文書』、53頁)。なお、相模国の寺社領に関しては、神崎彰利「相模国寺社領の成立」(『論集 関東近世史の研究』、名著出版、1984.12)などで検討されている。
- 22) 「大山史」(『相模大山縁起及文書』、53頁)。慶長十五年(1610)の大山寺は<山上山下為静謐…>という様子で、改革がなったことが窺える(『大山寺記録写』手中家資料<4976>)。
- 前略 ---
- 一同十五巳酉年、山上山下為静謐 御壁書之、
御黒印被成下之
- 後略 ---
- 23) 明王太郎が正式に御師として認められ、大工職と御師職を兼ねるのは寛文(1661-1673)から享保(1716-1736)の頃と推定されている(『伊勢道中日記 旅する大工棟梁』、162頁)。
- 24) 「下糟谷之庄之内於前高森ニ云々」(手中家資料<11>)。
- 前略 ---
- 一東照君様入御被為遊御座、大山寺之儀は、
元清僧之地二付、俗駄之者向後住居御停止二付、
同二月中旬上糟屋之庄之内秋山村三王原小名
手前枹地へ引移住居之
一同年四月伽藍願御修造、伊奈備前守殿
御登山御見分被遊、本宮之義者明王太郎
見分仕候而禁断所二付依而古来之通明王太郎
見分仕候而、仕様書可差出被仰付、御意之通り
見分積書差上之、諸伽藍向御修復被仰付、
御用相勤之
- 後略 ---
- この文書は訂正の跡が甚だしく、誤記も見られることから、他の原本を筆写したものであることが分かる。作成年は不明だが、文化九年(1812)の事柄までを記している。また、この他にも明王太郎が記した由緒は幾つか存在するが、内容はほぼ同様である(例えば、「口上書下書」(手中家資料<301>)や「上」(慶長十年~文化十年手中家由緒) (手中家資料<363-1>)など)。
- 25) 『駿河志料』には、「大神御在城となり、先祖花村長左衛門、御修理の事勤仕し、慶長の度相模國箱根権現社、宝殿、拝殿、御建立ありしに、…」とあり、花村姓の大工が家康に従えていたことが分かる(橋本博 編『駿河志料第三編』、静岡郷土研究会、1930.05、59頁)。
- 26) 「大山史」(『相模大山縁起及文書』、68頁)。
- 27) 国史大系編集会 編『徳川実紀』第三篇、吉川弘文館、1976.06、133頁。
- 28) 大山周辺域から江戸へ物資を輸送するには、花水川の他に相模川が利用された。それら河川は、相模平野を縦断し相模湾へと注ぐ。高瀬舟によって下った後に、河口に置かれた湊(須賀湊など)で廻船に積み替えられ、海上輸送される(平塚市 編『平塚市史』9 通史編 古代・中世・近世、平塚市、1990.03)。
- 29) 「大山史」(『相模大山縁起及文書』、69頁)。
- 30) 手中正「手中明王太郎と大工文書そして明王太郎敏景」(『伊勢道中日記 旅する大工棟梁』、146-148頁)及び、神奈川県教育庁生涯学習部 編『神奈川県近世社寺建築調査報告書(本文篇)』(文化財保護課、1993.03、16頁)。
- 31) 鎌倉市文化財総合目録編さん委員会 編『鎌倉市文化財総合目録-建造物篇一』(鎌倉市、1987.03、410頁)では、寛永期の造営において幕府組織による建築であることが殊に指摘されている。棟札には「大工藤原(鈴木)長次」の名前が記されており、実際に幕府方の大工頭が参加していることが分かる(鎌倉市市史編さん委員会 編『鎌倉市史』近世資料編第一、鎌倉市、1958.02、101-102頁)。
- 32) 「下糟谷之庄之内於前高森ニ云々」(手中家資料<11>)。
- 前略 ---
- 一寛永十五年戊寅四月七日、大山寺伽藍御再興願、
土意寺社御奉行安藤右京進松平出雲守兩
御奉行御見分之上、明王太郎棟梁職大権現
諸宮石尊宮本社共往古より依深秘而明王太郎
棟梁職被仰付、同十七寅辰八月十四日御新初
相済、同十八年辛巳十一月皆出来也
- 後略 ---
- 33) 「大山史」(『相模大山縁起及文書』、70頁)。
- 34) 延宝三年(1675)八月十九日の日付で、「王子金輪寺へ金五百両。樽木二万挺。大山八大坊へ金二百両下さる。みな修理の料なり」と記録されている(『徳川実紀』第五篇、219頁)。
- 35) 手中正「手中明王太郎と大工文書そして明王太郎敏景」(『伊勢道中日記 旅

- する大工棟梁』、148-149 頁）において、元禄期の大山寺普請に関して触れられている。そこでは、造営の担い手に在方の大工が参加し始めることなどが記述されているが、本稿ではその捉え方に若干の相違があるため、改めて造営の概要を辿ることを行う。
- 36) 八大坊は奉行に宛てて、貞享五年（1688）正月二十七日・同年二月・翌元禄二年（1689）十一月に、それぞれ修復の願い出に関する書面を提出する（『大山史』『相模大山縁起及文書』、76-79 頁）。
- 37) 『大山史』『相模大山縁起及文書』、79-80 頁。
- 38) 寛永十年（1633）二月の「関東真言宗古義本末帳」には、「伊豆山・般若院、国府津・宝金剛寺、箱根山・金剛山、鎌倉・浄国院、手広・青蓮寺、鎌倉・莊嚴院」が列挙されており、本文中に言及する五ヶ寺とは異なると共に、八大坊（大山寺）が記載されていない（鎌倉市市史編さん委員会 編『鎌倉市史』近世資料編第二、鎌倉市、1987.07、73-74 頁）。
- 39) 高橋千恵「江戸幕府宗教政策にともなう関東真言宗寺院の変容―「関東五ヶ寺」王子権現社別当禪夷山金輪寺を通して―」『王子村 大岡家文書 調査報告書Ⅰ』文化財研究紀要別冊第 14 集、東京都北区教育委員会生涯学習部生涯学習推進課文化財係、2000.03。
- 40) 幕府は伊豆・箱根・鎌倉の見分を決め、坂本三郎兵衛を派遣している（鈴木棠三／保田晴男 編『近世庶民生活史料 未刊日記集成』第四巻 鈴木修理日記 二、三一書房、1998.01、463-471 頁）。また、『徳川実紀』第六篇（271 頁）にも、関連する記述がある。
- 41) 『徳川実紀』第六篇、155 頁。
- 42) 手伝普請に関しては、善積美恵子氏の一連の研究がある（「手伝普請について」『学習院大学文学部研究年報』14（学習院大学分文学部、1968.02 など）。
- 43) 『国幣小社伊豆山神社誌』、伊豆山神社附属伊豆権現講社本部、1942.07、24-26 頁。小田原藩の手伝普請に関しては、下重清『幕閣譜代藩の政治構造―相模小田原藩と老中政治―』近世史研究叢書 14（岩田書院、2006.02、161-165 頁）において検討されている。
- 44) 善積美恵子「手伝普請一覧表」『学習院大学文学部研究年報』15、学習院大学分文学部、1969.02）によると、手伝普請で大山寺が造営されたことはない。
- 45) 町棟梁の名称は、作事方にある大工棟梁の職名と同義に用いられる（西和夫「江戸幕府作事方大棟梁石丸家について―町棟梁より登用の背景と大棟梁としての略系譜―」『日本建築学会大会学術講演梗概集』54、日本建築学会、1979.09）。
- 46) 『近世庶民生活史料 未刊日記集成』第四巻 鈴木修理日記 二、388 頁。見分の用は、まず初めに大工頭の鈴木修理長頼が聞き及んでいる。なお、五味は伊豆奉行（代官）、内山・豊前は林奉行である。
- 47) 『近世庶民生活史料 未刊日記集成』第四巻 鈴木修理日記 二、393 頁。また、見分の内容としては、運搬経路の確認（花水川・大磯）や御林の視察（丹沢・煤ヶ谷）などを行っている（『大山史』『相模大山縁起及文書』、83 頁）。見分の結果としては、明王社の「木取注文之事」が残されている（「木取注文之事」手中家資料〈48〉）。
- 48) 『近世庶民生活史料 未刊日記集成』第四巻 鈴木修理日記 二、405-406 頁。
- 49) 入札にした入用物品（金三千九百六十両余で漆二十桶・樽木四万八千六百三十丁・槻六百九十本・杓百六十本など）は、八丁堀檜皮屋の久右衛門が落札する（『大山史』『相模大山縁起及文書』、83-84 頁）。
- 50) 『徳川実紀』第六篇（170 頁）や、『近世庶民生活史料 未刊日記集成』第四巻 鈴木修理日記 二（414 頁）など。
- 51) 『大山史』（『相模大山縁起及文書』、87 頁）。
- 52) 高森村（伊勢原市高森）鎮守若宮八幡宮に遺された寛文十一年（1671）の棟札には、＜大工上粕屋村/明王太郎弟子/田中三郎兵衛＞と記されており、その存在が確認できる（伊勢原市史編集委員会 編『伊勢原市史』資料編近世 2、伊勢原市、1996.03、486 頁）。一方で、明王太郎は初め田中性を名乗っており、親類の関係にあったことも想定される（手中正『宮大工の技術と伝統 神興と明王太郎』、東京美術、1996.04、27 頁）。
- 53) 『大山史』（『相模大山縁起及文書』、82 頁）。
- 54) 「請取申金子之事」（手中家資料〈53〉）。

請取申金子之事

合金式百九拾壹兩貳分銀拾四匁者 但小判也
右是者今度相州大山堂社御修復被
仰付候處ニ、本宮之分禁断之場所ニ御座候、右
入札難被仰付候ニ付、右之社先規より仕来候棟
梁明王太郎ニ御入用積リ被仰付、一色請切ニ
金高式百九拾壹兩貳分銀拾四匁ニ而御請負
仰付、右之金子拙僧方江樋請取所実正ニ

御座候、然ル上ハ明王太郎ニ申付急度御普請
為仕立可申候、為後日仍如件

元禄六年酉ノ五月 相州別当 八大坊

本田新五兵衛殿

木部勘右衛門殿

浅岡勘兵衛殿

五味小左衛門殿

豊前十衛門殿

55) 「本宮御社一式入用」（手中家資料〈50〉）、「本宮社御宮殿御法所御入用帳」（手中家資料〈58〉）など。

56) 「御吟味高」（手中家資料〈49〉）。

御吟味高

都合代金貳百九拾壹兩貳分銀拾四匁

右御修復伐木鉄物大工木挽作料其外一式

請切之積リ、御入用改分入念積リ仕指上ケ申候、大工

木挽入足等本宮ニ束中罷有て義難成、麓より

山上迄道法四拾町余之難所毎事罷登リ御普請

仕立申候ニ付、御入用等少之多ク懸リ申候、勿論諸宮

請切ニ被仰付候上ハ縦積リ違仕候共、右代金内ニ而

無夫儀急度仕立可申候、不依何ニ簾相成義

仕候ハハ、い可様之曲事ニも下仰付候、以上

相州大山明王石尊棟梁

元禄六年酉三月

明王太郎

御奉行様

57) 「一鎌倉大工惣右衛門呼寄、此度八幡宮御修復方工割之儀難申付候間、棟梁共致候雇大工之内江入、雇作料ニ而相勤候様こと申渡、尤大隅方江参、疾と承合候様こと、伝右衛門申渡」（鈴木棠三／保田晴男 編『近世庶民生活史料 未刊日記集成』第五巻 鈴木修理日記 三、三一書房、1998.05、8 頁）。

58) 明王太郎の作成する文書には、＜棟梁職＞という言葉が散見される。それらの使用方法を見ると、具体的な組織や特定の役職に対して用いられるということではないようである。むしろ、「指導的立場にある大工」という程度で理解することが適当と考えられ、本稿でも「棟梁職」という言葉の用い方はこれに倣う。

59) 「請取申金子之事」（手中家資料〈53〉）。注 55) 参照のこと。

60) 「口上」（手中家資料〈57〉）、「乍恐書付ヲ以申上候事」（手中家資料〈2952〉）、「相州大山大工棟梁明王太郎由緒書」（手中家資料〈4630〉／「明王太郎由来」『相模大山縁起及文書』、17 頁）など。

61) 「口上」（手中家資料〈57〉）。

口上

去年霜月大山御見分之節、五味小左衛門様

内山七兵衛様豊前十左衛門様町棟梁橋本七左衛門殿

川合利兵衛殿御越被成候節、①拙者義我当山中

御宮不残御案内仕候而右之御衆中様御見分

被成候、②御本宮之儀者拙者老人ニ而見分仕委細

様子申上候、③御修覆御座候先祖より代々勤来候

様ニ④拙者ニ棟梁被為 仰付被下候様奉願候

元禄六年

相州大山大工棟梁

明王太郎

また、「乍恐書付ヲ以申上候事」（手中家資料〈2952〉）では＜入札＞の文言が見られる。

乍恐書付ヲ以申上候事

一相州大山不動御修覆ニ付、去年申ノ霜月五味小左衛門様

内山七衛門様豊前十左衛門様御積分ニメ出殿此前不動

御社堂入札ニ被仰付候、不動惣社堂之内本宮石尊権現

先規

明王権現両社之義はより来棟梁相勤□□申様

--- 後略 ---

「口上」（手中家資料〈57〉）の下書が、以下の「4630 相州大山大工棟梁明王太郎由緒書」（手中家資料〈4630〉）であろう。

--- 前略 ---

口上

先年霜月、大山曰曰見分之節五味小左衛門様

内山七兵衛様豊前十左衛門様町棟梁橋本七左衛門殿

川合利兵衛殿メ仕被出候節、拙者儀罷出山山中

御宮不残御案内仕候而、右之御衣中様御見分曰

□□□□□□□□□□□□□□

- 御本宮拙者耆人ニ而
見分仕委細様子申上候、御修覆御座候、先祖より
仕候勤来様ニ拙者ニ棟梁被為 仰付被下候様奉願候
既に、＜入札＞に関する文言は削除されている。
- 62)「覚（材木代銀領収書）」(手中家資料 <51>)。
--- 前略 ---
右者代金銀不残慥ニ請取相済申候、
若伐木王れくるいをれぬけ婦し
御座候者、何時成共取替相渡シ可申候、
為後日仍如件
江戸 白子屋 吉左衛門
元禄六年酉ノ五月十六日
平井彦右衛門殿
明王太郎殿
- 63)『近世庶民生活史料 未刊日記集成』第五卷 鈴木修理日記 三、490 頁。「大山史」には、同年三月に寺社奉行の阿部飛騨守正喬が来訪するとある（『相模大山縁起及文書』、94 頁）。
- 64)『近世庶民生活史料 未刊日記集成』第五卷 鈴木修理日記 三、493 頁。
- 65)「宝永元年相州大山本宮社見分覚（二冊）仕様帳入用積り帳（四冊）」(手中家資料 <68>)。
- 66)「大山史」（『相模大山縁起及文書』、94 頁）。
- 67)『近世庶民生活史料 未刊日記集成』第五卷 鈴木修理日記 三、495 頁。
- 68)「宝永元年相州大山本宮社見分覚（二冊）仕様帳入用積り帳（四冊）」(手中家資料 <68>)。
- 69)「宝永元年相州大山本宮社見分覚（二冊）仕様帳入用積り帳（四冊）」(手中家資料 <68>)。
--- 前略 ---
右者大山御修覆、寶永元申四月十日雨宮勘兵衛様、是ハ
御代官御大工方川辺六衛門様町棟梁式入大山口越被成
御見分被慥、同廿日二大山口たち被成明王太郎同廿七日二国元出江戸へ
罷こし、五月十三日二此帳面御奉行雨宮勘兵衛指上ケ申候
- 70)『近世庶民生活史料 未刊日記集成』第五卷 鈴木修理日記 三、501 頁。
- 71) 在府の奉行は、飛脚による伝達で二百両の下附を知らせている。（「大山史」『相模大山縁起及文書』、97 頁）。
- 72) 上屋敷などから年六十四両を充てることが六年計画で決められていたが、実際の総額は二百七両にとどまった（「大山史」『相模大山縁起及文書』、97 頁）。
- 73)「御宮御普請御入用帳」（手中家資料 <84>）。
- 74) 幕府は享保期を境に、普請費用は勸進等によって自ら調達させることを基本方針とした（三浦俊明『近世寺社名目金の史的研究—近世庶民金融市場の展開と世直し騒動—』、吉川弘文館、1983.02、22 頁）。
- 75) 寛保元年（1741）・宝暦七年（1757）・明和六年（1769）・寛政二年（1790）にも、関連する触れが出される（大蔵省 編『日本財政経済史料』巻四、財政経済学会、1924.11、776-783 頁）。
- 76) 高柳真三 / 石井良助 編『御触書宝暦集成』、岩波書店、1935.03、317 頁。
- 77)「大山史」（『相模大山縁起及文書』、103 頁）。
- 78)「御宮御再立棟梁職被仰付被下置候処」（手中家資料 <145>）。訂正が見られるので、本史料は下書として作成されたものであろう。
--- 前欠 ---
御宮御再立棟梁職被仰付被下置候様、御役寺様
乍恐
御慈悲を以被仰上被下置候ハハ、偏ニ難有仕合奉候、
被儀
より代々之棟梁職
右申上候通被下置候ハハ、先祖
明王太郎之□名 孫
永鋪任ニ相談仕候ハハ、子永々難有
御儀ニ奉候、以上
明和八年辛戌 三月 大工棟梁
明王太郎
大山 御別當所
御役寺様
- 79)「明和八辛巳三月御奉行所差上候扣（相州大山寺大天狗社建地割絵図）」(手中家資料 <144>) 及び「明和八辛巳三月御奉行所差上候扣（相州大山寺小天狗社建地割絵図）」(手中家資料 <146>)。確認されるのは大天狗社と小天狗社の建地割図のみだが（但し残されているのはその袋）、他の堂舎の差図も作成したと判断される。
- 80) 弟子は、六兵衛・弥右衛門（十日市場村）・久内（東富岡村）の三人が記

- 録されている（「本宮五社御普請二付日記」手中家資料 <147>）。この内、久内は安永四年（1775）の石雲寺で行われた普請の棟札に名前が記されている（「医王山石雲寺 上棟祭祝詞と棟札控」手中家資料 <189>）。
- 81)「大山史」（『相模大山縁起及文書』、104 頁）。
- 82)「本宮五社御普請二付日記」（手中家資料 <147>）。
- 83)「本宮御普請御用日記」（手中家資料 <197>）。
- 84)「大山史」（『相模大山縁起及文書』、99・103-104 頁）。
- 85) 保垣孝幸「近世中～後期における寺社「御修復」願の展開過程—武州豊島群王子村王子権現社別当金輪寺の場合—」（『王子村 大岡家文書 調査報告書Ⅰ』文化財研究紀要別冊第 14 集、東京都北区教育委員会生涯学習部生涯学習推進課文化財係、2000.03）。
- 86)「大山寺本宮絵図」（手中家資料 <225>）。
安永六年四月六日 御手斧初メ
安永七年四月十二日 御柱立祭
同六月十五日 御上棟祭
同十六日 御上迁座
- 87)「本宮普請着到扣」（手中家資料 <200>）、「本宮普請着到覚」（手中家資料 <216>）。
- 88) 差図脇に＜同見習棟梁嫡二十五歳 / 同苗匠三郎忌部景喜＞とある（「小天狗御宮差図（大山小天狗社差図・建地割図）」手中家資料 <195>）。
- 89)「奉再興石尊大権現宝宮」（手中家資料 <3351>）。
- 90)「本宮普請着到扣」（手中家資料 <200>）。
- 91)「大工弟子奉公人請状之事」（手中家資料 <172/186/187>）。庄助は安永元年（1772）七月より中荻野村から十二季で、安右衛門は安永四年（1775）四月廿一日より荻野村から七年季で、弥右衛門は安永四年（1775）七月より六年季で、それぞれ弟子入りした。
- 92) 王子神社（王子権現）の修復歴を記録した文書には、安永九年（1780）三月の項に「御社頭并稲荷社其外共無残処、小普請方より御修復被成下」と記述されている（「御用留」大岡家文書 <11-4>）。なお、この史料は、『王子村 大岡家文書 調査報告書Ⅱ』文化財研究紀要別冊第 15 集（東京都北区教育委員会生涯学習部生涯学習推進課文化財係、2003.03、56-90 頁）に翻刻されている。

附記

・手中家資料の〈 〉は『相模国大山大工棟梁手中家資料所在目録稿』（神奈川県教育委員会、1997.03）の整理番号に準じている。

（2009 年 1 月10日原稿受理，2009 年 6 月24日採用決定）